

花、里、民家、



さようなら

私の好きだった

風景

佐野昌弘

第二章

芽吹き

睦月（2月） 弥生（3月）

春の小川はさらさら行くよ
岸のすみれやレンゲの花も

こんな風景は日本の何処にも有りました、
網と籠を持って一日中水の中に、
メダカやドジョウを追って過ごしたり、
レンゲの花で首飾りを作った
思い出を持った方が
多く居るのではないのでしょうか。



都美山町大野

庭先の老梅が香り、ぬるんだ小川の土手に土筆が
顔を出して里山に春がやってくる。

野山に桜が華やぎ、あぜの緑が芽吹くころは
里山の民家がいちばん光る季節である。

田んぼをキャンバスにして、
一面に花の海
恵みの光りに霞んで、
民家は絵になり、
詩になる。



京都美山町萱野

あった、あったよ 母さん、

ここにも、ここにも。

京都市内よりだいぶ遅い春が

美山町にやって来た

畑の畦で野草を探す

母子の声も温かい



京都美山町

春風吹いた

桜も咲いた

菜の花満開

そろそろ

田起こし

始めよか



美山町下平屋

ちよこっと 春が



三重県名張市郊外

ぼつ ぼつ と桜
もうすぐ満開
四十八滝への道



京都美山町大野

由良川のほとり

ダム越しに見る大野の集落

静かな朝

ご感想、お待ちしております。

佐野昌弘

masahiro.s@daccs.jp